

講評：

応援します！ 台湾の川柳

(一般社団法人) 全日本川柳協会副理事長・江畑 哲男

再び台湾の皆さんとお目にかかれました。嬉しいです。有り難うございます。改めて、「第2届全国日語川柳大賽」、おめでとうございます。

応募していただいた皆さん、有り難うございます。

同時に、こうした大賽を企画し、練り上げ、再び実現に漕ぎ着けられた関係者の皆さんに対して、心からの敬意を評し、感謝を申し上げる次第です。全日本川柳協会の役員として、大変喜んでいるところでございます。

さて、川柳は人生を詠みます。人生の喜怒哀楽がテーマです。若い時からこうしたポエムに慣れ親しんでいただけると、人生がより豊かになり、充実したものになることでしょう。そう信じております。

川柳という文芸は、今年のNHK大河ドラマ「べらぼう」の時代とほぼ同時期に誕生いたしました。いまから約270年前のこと。宝暦7年(1757年)に、「川柳評万句合」という興行が行われたのでした。

万句合(まんくあわせ)というのは一種の懸賞募集興行で、柄井川柳(からいせんりゅう、「初代川柳」と称される)という人が、初めて点者(=選者)として立机(りっき、宗匠になること)した、という歴史に由来します。

川柳のバイブルとも言われる『誹風柳多留』(はいふうやなぎだる)の初編が刊行されたのが、明和2年(1765年)のことでした。この本は当時、たちまちベストセラーになりました。

令和の今日、「川柳」という文芸名とともに、『誹風柳多留』(もしくは『柳樽』)という書名を、台湾の皆さんも一度は聞いたことがあるでしょう。そうなのです。後生にその名を残すほど、新興都市江戸の人々を魅了したのが川柳。川柳という文芸だったのです。

「まるで野球の大谷翔平選手みたい」とまでは申しませんが(笑)、大いに人気を博しました。覚えておいてくださいね。

その川柳がなぜ民衆に愛されたのか？ その理由は、簡単です。前述の通り、川柳が人間の生活と結びついている文芸だったから、なのです。

川柳という大衆詩が扱う対象は、人間と人間社会。五七五のリズムを基本として、多彩な人間の多面的な実像に迫ろうとしていくのです。それゆえ、愛されるのでしょう。入選作品にも、皆さん方の生活や心象風景が投影されていたのがよく分かりました。

応募者の皆さん。

川柳というこの人間くさい文芸をこれからも愛してください。川柳に親しく接しながら、人生を大いに謳歌してください。皆さん方の人生がますます輝きを増すことを願って、全体の講評と致します。有り難うございました。

句評：「時間」の入選句とコメント

《第1席》 「秒針がナイフに見えた試験中」。

（句評）「ナイフ」という比喻がすばらしかった。試験というのは、まさに一分一秒を争う知的な闘い。刻々と迫る終了時刻。まさに、時計の秒針が「ナイフに見えた」のかも知れませんね。下五の名詞止めもまた良し。迷わずに第1席に推す。

《第2席》 「一瞬で大人になった君のキス」。

（句評）恋をして大人になる。時には、恋に破れて大人になる！（笑）。いずれにしろ、恋は青春の記念碑であり、成長の一里塚。「君のキス」で飛躍的に大人になることもあったのだろう。はつらつとした一作に拍手を贈る。

《第3席》 「人生は線香花火すぐ消える」。

（句評）哀しい現実である。美しくも儚いもの、それが人生だ。彩りはそれぞれあるに違いない。そんな人生を作者は「線香花火」に喩えている。達観した大人の味わいがある秀作と言えよう。

《佳作1》 「待つ時間三分なのに長すぎる」。

（句評）普段は短い三分。「待つ」となると、今度は「長すぎる」。川柳らしい見つけ。「長すぎる」が言い得て妙だった。

《佳作2》 「黒板の字読み飛ばすたびに船を漕ぐ」。

（句評）ユーモア句。「船を漕ぐ」という慣用句を使いこなしている。その日本語力の高さにビックリ。

《佳作3》 「穴だらけ大学生の時間割」。

（句評）これまたユーモア句。振り返れば、小生も「穴だらけ」の時間割だった。その「穴」を何で埋めるかが、今後の人生を左右するだろう。

《佳作4》 「気がつけばスマホに吸われ無い時間」。

（句評）なるほど。「スマホに吸われ」、その「吸われ」という句語が面白い。「スマホに吸われ」と、時間をたちまち浪費する。たしかに！

《佳作5》 「時給ならいくらになるか今日の無駄」。

（句評）時給に換算したところが現代的。川柳は変わらぬ人情も詠むことが出来る一方、移りゆく世相をも詠める。その典型のような一句だった。

句評：「弁当」の入選句とコメント

《第1席》 「いつ来るか割引弁当ガン見中」。

（句評）「ガン見」がよかった！ 面白かった！ 生活実感溢れる秀作となった。上五の「いつ来るか」もまたすばらしい。リアリティーいっぱい。作者の勢いある表現力に脱帽した。

《第2席》 「お弁当ふたを開けると愛がある」。

（句評）一転して、叙情的な作品。豊かな情感のこもった秀句となっている。お弁当には「愛」がある。中七「ふたを開けると」に、ドラマ仕立て風の味わいがあった。

《第3席》 「キャラ弁が崩れた後は化け物だ」。

（句評）「キャラ弁」、ねえ。こうした俗語を取り込めるのも、川柳の強み。フトコロの深さだ。「化け物」になってしまった「キャラ弁」が目には浮かぶよう。

《佳作1》 「母の味フタを開ければ笑みこぼれ」。

(句評) 第2席も「ふた」。比べてみると、こちらは「フタ」とカタカナ表記になっている。日本語表記の豊かさ。下五の「笑みこぼれ」で、実感を素直に述べている。

《佳作2》 「駅弁の蓋を開ければ旅はじまる」。

(句評) さらにこの「蓋」。こちらは、漢字で表記した。下五は、「旅はじまる」と動きが入っている。楽しい旅がはじまりそうだ。

《佳作3》 「はじめての弁当作り焦げ茶色」。

(句評) ユーモアはいい。ユーモアは読む人をほっこりさせる。そのほっこり感にじみ出た作品。自分の「失敗」をさらけ出したところに好感が持てた。

《佳作4》 「食べる時彼女の隣恋の味」。

(句評) 茶目っ気たっぷりの一作。上五「食べる時」から中七「彼女の隣」へと続いたあとの下五。この展開が面白かった。「恋の味」、バンザイ！

《佳作5》 「お弁当胃袋掴んで彼ゲット」。

(句評) 「ゲット」というカタカナ語を用いた。いかにも現代的な男女の様子を詠んでいる。「胃袋掴んで」という中七も、なかなかユニークな言い回しだった。